

安宅の松

長唄 全詞章

本名題「限取安宅松」

〔道行〕 旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん、都の外の旅の空、日もはるばると越路の末、思ひやるこそ遙かなれ

東雲早く明けゆけば、浅茅色づくあらち山

氣比の海、宮居久しき神垣や、松の木め山、尚行く先に見えたるは、杣山人のいたとり
川瀬の水の遊ぶつや

末は三国の港なる、蘆の篠原浪寄せて、靡く嵐の烈しきは花の安宅に着きにけり

〔本調子・里の童〕 落葉かくなる里の童の、野辺の遊も余念なく

そりやたがめづきちつちや、子もちや桂のはちんがはちんがはちんが、ちんがらこ、走り走り走りついて先へ行くのは酒屋のおてこ

あとへさがるは狼狐、あまが紅ついて

ととやかかに言はうよ言うたら大事か、そつてくりよ

葉越しの葉越しの月の影

〔二上り〕 裏のなア、裏の背戸やの今年竹、笛にしようもの草笛に、笛になりたや忍ぶ夜の、

笛は思ひを口うつし、アアアしよんがいなしよんがいな、忍ぶ

忍ぶ其の身は安宅の松よ、雪の夜毎の潮風に、もまれもまれて立ちつくし、

あかしてこれしてしよんがいな、面白や

〔子宝の唄〕 絶えずや子宝、一に千石米蔵常陸の国のつのおかに、黄金の花が咲いたよさ、

につこりはつこりホホホ

ホホホお笑ひめしたはしつかい在所の在屋殿だんべい、いつかいいつかい俵に、

酒樽千杯万杯万杯まんまん杯うっておけしやんしやん

神の鈴はしやんぐしやんぐと、さつても揃ふた子宝

一度にとへばおとよけさよ、辰松ゆる松だんたらいなごにかいつくぼう、

かいつくひつつくしやんしやん、扇に馴染む風の子や

〔疾風〕 風の木葉の散り散りに、里をさしてぞ、ゆめゆめ疑あら磯の、砂を飛ばす土煙、

梢の木葉もはらはらはら

俄に吹き来る疾風風、天地も一度に鳴動して

岩石枯木ゆきゆきゆき、どろどろどつと山嵐の、風かあらぬか其の姿、見失ひてぞ立ちにける